

タンカー船とハワイ行き列車

清宮 聡子

「さようなら」の声と共に今日もクラスの子どもたち全員を引き渡し終えた。その瞬間頭の中に、一日の出来事が凄いスピードで思い起こされる。そしてそれぞれについて自分なりに「アーあの時もう少し違う言葉を掛けていれば」とか「あの時のMちゃんとNちゃんはとても良い表情をしていたな」等、玄

関前から保育室のほんの数メートルを戻る間、私の

頭はフル回転している。四月から三歳児を担当し、二学期もあと僅かと言う十二月であるが、子どもたちを送った後は毎日この様な状態で保育室に向かうのであった。

この日もいつもと同じ様に頭をフル回転させながら、保育室に入ろうとした。出入り口の前に立った途端フリーの先生と年長児のA夫とB夫が二人、木

製の汽車とレールを使って遊び初めている光景が目
に飛び込んできた。予想外の光景に驚いている私に
フリーの先生が「来たら始まってたんです」と教
えてくれた。保育室にはまだお帰りをした時のまま
椅子が円く並んでいたが、そんな事は全く気になら
ないといった様子で二人は遊んでいた。私はA夫に
ここで遊んでいることを担任の先生が知っているの
かどうか聞いた。A夫はぱつと顔を上げ、「言つて
来たよ」と答え、またレールを広げた床に顔を戻し
た。

三歳児が午前保育の日は午後の保育室は空っぽの
空間になる、今までに午後数回年長児が訪れる事が
あった。しかし、三歳児の降園後すぐの時間にこう
して二人の男児が現れ、しかもかなり集中して遊ん
でいる姿を目にしたのは、初めてであった。時計に
目をやると、そろそろおべんとう前の片付けが始ま
る時間であった。二人はどうするのであるうかと思
いながら、フリーの先生にその場は見てもらう事に

し、私は一度職員室に戻る事にした。

木製の汽車とレールで遊ぶA夫とC夫

フリーの先生から二人の事を聞き、昼食をとつ
た。「またA夫たちが汽車をしに来るかもしれない」
と思いつながら、保育室に向かった。予想通り保育室
の出入り口付近から部屋の中心に向かってレールが
敷かれていた。遊んでいたのはA夫とC夫だった。

レールが先程より広い範囲に敷かれている。レール
を入れておく籠が二つ空になつてゐる。多分隣のク
ラスの物を持つて来たのだらうと思いつながら、A夫
に「すごく長いレールになつたのね」と声を掛け
た。「うん、そうだよ、僕がつなげたんだ」とはつ



きりと答えてくれた。

一方でC夫は、八車両程つなげた列車を動かしながら、レールのコースを少し複雑なものにしようとしていた。A夫は更にレールを先に延ばそうとつなげている。私は担任の先生に二人が部屋に来ている事を伝えに行った。先生にお話したところ、既に確認なさっていたようで、A夫は友達から砂場で遊ぶうと誘われたが、それを断って汽車遊びを選んだのだった。A夫は汽車で遊ぼうと、強い意志を持って来たのだと知った。

再び年少児の保育室に戻ると、C夫がレールをなかなかつなげず、苦勞していた。「先生ここが出来ない」と言われ、カーブする部分を作るのを手伝った。レールの連結部品が硬くはまっていて取れなかったのである。自分のイメージ通りのレールコースを作ったC夫は列車を走らせ始めた。私は二人がそれぞれに動き初めた事を感じ、彼らと少し距離をおこうと思った。保育室の材料棚を整理しながら、

様子を見ることにした。

タンカー船を作るA夫

A夫はC夫の様子を時折気に掛けていたが、大部分を自分で作り上げたこのレールコースを友達が楽しそうに使っている事が嬉しいと感じている様に見える。

C夫が何やら口にしながら、列車を動かしている。「タンカーに荷物をのせまあーす」と言っているのが聞き取れた。私は「へえー港まで行くんだ、その列車」とC夫に声を掛けた。C夫は「うん、そうだよ。タンカーに乗るんだ」と楽しそうに答えた。A夫が急にプラスチックの鋳型ブロックが入っている箱の前に移動し、何か組み立て始めた。そして、素早く作りあげた直方体を横倒しにし、床を滑らせるようにし「タンカーだよ」と言った。C夫はすぐにA夫の方に列車を動かした。

そこへD夫が入って来た。「何やってるの、すこ

いじゃんこれ」と言つてレールをぐるりと見回した。「そうだよ、おれたちが作ったんだよ」と得意げに答えるA夫。「おれも入れて、入れて」とD夫がA夫に頼んだ。「いいよ」と嬉しそうに答えるA夫の表情を見て私はA夫が満足感に満たされているように感じた。自分が始めた遊びに、一人また一人と友達に加わる、そしてイメージを持ちながら楽しんで、そうしている姿を見る事で、A夫はある種の自信を得たのではないだろうか。A夫は以前からイメージを持ちながらも、それを友達と共有して遊びこむ事が出来ない場面が多い人であつた。活動の途中で相手を非難することになつてしまつたり、投げ出してしまつたりと、担任の先生からもその点について話を聞いていたので、今日のこの展開は彼にとって良いと思つた。また、汽車のセットを使った活動が年長児にとつて、展開し易いものであつた事もプラスに働いたのかもしれない。

ハワイ行き列車

D夫は列車をレールの上で走らせながら、「ハワイ行き、ハワイ行き」と言っている。「ハワイ行き列車」という発想が面白いと思ひ、D夫に「それに乗るとハワイに行けるの、素敵な列車ね」と言つた。D夫は「そうだよ！」とにこにこしながら答えた。

その時C夫が「あーあ、だめじゃないかこれじゃ」と声を上げた。どうしたのだろうかと目を向けると、A夫が作ったタンカー船に汽車が入り切らず、つなげてあつた汽車がバラバラになつてしまつたのだった。確かにA夫の作ったタンカーが小さかつたのであるが、だからといつてA夫が悪い訳ではない。しかし、C夫の言葉にはA夫を非難しているような感じがあつた。A夫がC夫の側で険しい表情を見せている。私は二人がここでこの活動を投げ出してしまふような気がした。そこで二人に近付

き、C夫に「Aくんが今タンカーを大きく改良してくれると思うから大丈夫、汽車をもう一度繋げて待つていようよ」と声を掛けた。A夫も続いて「大丈夫だよ」と言つて、箱からブロックを取り出した。C夫は見通しが持てた様で、汽車をタンカーから取り出し繋げ直し始めた。C夫がこの事で全てを投げ出さずに続ける事が出来て良かったと思つた。

A夫がタンカーを作り直しC夫に渡した。C夫は「すごい！」と言いながら汽車をタンカーの中に入れた。A夫はもう一つ大きなタンカーを作つていた。全長が七十七センチメートル程あるものでそれを自分で動かして、ままごとコーナーの畳の側まで進めていった。「先生、ここが港なの」と言いながら、ままごと用に置いてある木製の囲いを畳の縁に立てた。全長があるタンカーが畳の縁にびつたりとくつついている様子と白い囲いの感じが、不思議とリアルに感じられてくる。レールの広がりや海の広がり、そこにイメージされているのは、見ている私にも

充分感じられた。C夫やD夫もそこに海を感じているようで、

C夫は汽車に乗せたタンカーを

自分で動かし始めた。D夫はハ

ワイ行きの列車を自分も小型のタンカーにのせたく

なつたようで、A夫に「ねえ、ねえ、C夫が使つて

いるようなタンカーを作つてよ」と頼んだ。A夫は

快く「いいよ、待つて」と言つて作り始めた。D

夫も自分で作れない訳ではないと思うが、この遊び

の中では、A夫に作ってもらいたいと思つたのだろ

う。この場面でもA夫の嬉しそうな表情が印象に

残つた。

お片付け

最終的にE夫が加わり、四人がそれぞれイメージを持つて遊んでいた。A夫は終始レールと海の広がりや意識しながら動いていた。C夫も港と列車に自分なりのイメージを重ねて遊んでいた。



D夫は作ってもらったタンカーを「ハワイ行き」として、ままごとコーナーに設けられた港を「ハワイの港」に見立て始めた。E夫も出上りがつた場の中にすんなり入り込み、汽車を動かし始めた。

気がつくと、片付けの時間になっていた。園庭から同じクラスのお当番さんが声を掛けに来てくれた。といつても、すんなり終わらせようと言う感じではなかった。「線路を元の通りに戻す事が出来るのは、あなたたちだけなのよ」と言うと、A夫がまず、二つのカゴを運び中央に置いた。「ここからが、M組のだよ」と言つてレールを外し始めた。D夫がそれを見て、同じ様にもう一つのカゴに入れ始めた。私が種類別に重ねてしまう事を提案すると、彼らはきれいに重ねようと、頑張つてくれた。C夫とE夫は、汽車をカゴに戻し始めた。かなりの量のレールと汽車を彼らは丁寧片付けた。A夫はタンカーに使つた鑄型ブロックを自ら「バラバラにした方がいいんだよねえ、先生」と言いながら分解し始

めた。A夫が最後に汽車のセットをお隣のM組に返しに行った。使つたものを全てを片付けた。

遊びの中でお互いを認め合い、トラブルを越えていく中で遊びが展開していたと思う。特にA夫は、満たされた気持ちで活動を終えたと思う。「じゃあ、またね」と言つてろう下を戻すその足取りは、軽やかであった。

一つの遊びの場面を通し、子どもたちがどんな思いを抱えているか、最初から終わりまでにそれらがどう変化していったか等を認識する事が出来た。保育者の言葉掛けのタイミングや量についても考えさせられた。そして、ひとりひとりがその遊びの中で、生かされている事を感じられる、そんな活動の積み重ねの大切さを再認識した。

きれいに並べられたレールに目をやりながら、ふとA夫の軽やかな足取りと後ろ姿が思い返された。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)